長岡城跡発掘調査報告書

－大手通り地下駐車場建設－

1997

長岡市教育委員会

序

この報告書は、大手通り地下駐車場建設に伴う長岡城跡の発掘調査の記録です。大手通り地下駐車場の建設計画が平成4年に立案され、長岡市教育委員会は、直ちに事業主体の新潟県長岡土木事務所と協議を行い、工事の前に発掘調査を行って長岡城跡の記録を保存することになりました。

長岡城は、江戸時代の初めに蔵王堂城に居た堀直竒が縄張りを行い、直竒が村上に移った後、長岡藩主として入った牧野氏が、城と町づくりを完成させ、北越戊辰戦争で落城するまでの約250年間にわたって牧野家12代の城として続きました。

明治に入ってから、本丸跡に建設された長岡駅を中心に、近代の町づくりが始まり、さらに第2次世界大戦後の戦災復興で、土塁など一部で残っていた城の施設はその姿を消し、現在、長岡城にまつわるものとしては、厚生会館脇にある「城内稲荷神社」と、数カ所の地名が残るだけです。

発掘調査の結果、堀跡2本と、堀底で井戸跡が4本発見されました。井戸跡は、長岡城が築かれる前の井戸で、中世における長岡の中心街の一端が初めて明らかになり、その意義は大きいと思います。

本書が、地域の埋蔵文化財にたいする理解と認識を深めるとともに、長岡城の研究をはじめ、学術研究の場で活用されることを願っています。

最後になりましたが、今回の調査に当たって御指導・御協力を賜りました新潟県教育委員会、新潟県長岡土木事務所をはじめ、関係機関並びに各位に心からお礼を申し上げます。

平成9年3月

長岡市教育委員会
教育長　大　西　厚　生

例　　言

1．本書は、新潟県長岡市に所在する長岡城跡の発掘調査の記録である。

2．発掘調査は、大手通り地下駐車場建設事業に伴う調査であり、事業主体の新潟県長岡土木事務所からの委託を受けて、長岡市教育委員会が調査主体となって実施したものである。

3．調査は、平成7年9月から平成8年5月にかけて、建設箇所ごとに分けて発掘を行い、調査資料の記録化のための整理及び報告書の作成を平成8年度に行った。

4．調査の経費は、事業主体の新潟県長岡土木事務所からの委託金である。

5．発掘調査の体制は、次のとおりである。

調査主体:長岡市教育委員会（教育長　大西厚生）

調査担当者:駒形敏朗（長岡市教育委員会副主幹）

発掘作業員:長岡市民（公募による）

調査事務局:長岡市教育委員会生涯学習課（課長　廣川清喜副参事）

6．発掘調査で出土した遺物及び測量図等の図面・写真等の調査記録は、長岡市教育委員会が保管している。出土遺物の注記は「長岡城96－遺構名称など」で記入した。

7．本書は、調査担当の駒形が整理作業員の協力を得て、図版の作成から本文の執筆及び編集をしたものである。

8．図版のうち、土層断面図脇の数字は、標高の数字である。なお、単位はメートルである。

9．発掘調査から本報告書の作成まで、下記の方々や機関から多大な御協力と御指導をいただいた。ここに氏名等を記してお礼を申し上げたい（五十音順、敬称略）。

小熊博史・金子拓男・鶴巻康志・水澤幸一・戸根与八郎・広井造・前山精明

新潟県教育庁文化行政課・新潟県長岡土木事務所

目　　次

1　環境と歴史……1
（1）地理的環境……1
（2）長岡城の歴史……2

2　長岡城の縄張り……3

3　調査の経緯……4
（1）これまでの主な調査……4
（2）大手通り地下駐車場建設に伴う発掘調査……4
①調査に至る経緯……4
②発掘調査の経過……6

4　遺　構……8
（1）近世の遺構……8
①二の丸の堀跡……8
②大手門付近の堀跡……10
（2）中世の遺構……14

5　遺　物……17
（1）近世の遺物……19
（2）中世の遺物……19

6　まとめ……19
（1）長岡城の堀について……19
（2）中世の井戸跡について……21

挿　図　目　次

第１図　長岡城跡位置図……1
第２図　発掘調査対象地周辺の地形図……2
第３図　長岡城跡縄張図……3
第４図　発掘調査区図……5
第５図　発掘調査区（Ａ工区）……7
第６図　発掘調査区（Ｃ工区）……9
第７図　二の丸の堀跡……11
第８図　発掘調査区（Ｂ工区）……12
第９図　大手門付近の堀跡……13
第10図　井戸跡位置図……14
第11図　第１号井戸跡……15
第12図　第２号井戸跡……16
第13図　第３号・第４号井戸跡……18
第14図　出土遺物……20

写　真　図　版　目　次

写真１　長岡城跡発掘風景①　発掘調査前の大手通り　道路舗装除去作業　路盤材撤去作業
写真２　長岡城跡発掘風景②　遺構確認作業　堀跡発掘作業　堀跡断面図作成作業
写真３　長岡城跡の堀跡①　二の丸の堀跡断面　二の丸の堀跡断面　大手門付近の堀跡平面
写真４　長岡城跡の堀跡②　大手門付近の堀跡　大手門付近の堀跡断面　大手門付近の堀跡断面
写真５　井戸跡①　第１号井戸跡検出状況　第１号井戸跡　第１号井戸跡断面
写真６　井戸跡②　第１号井戸跡井筒　第１号井戸跡隅柱組方　第２号～第４号井戸跡検出状況
写真７　井戸跡③　第２号井戸跡　第２号井戸跡隅柱組方　第２号井戸跡井筒
写真８　井戸跡④　第３号井戸跡　第４号井戸跡　第４号井戸跡遺物出土状況

1　環境と歴史

（1）地理的環境　（第１図・第２図）

長岡市のほぼ中央部に、信濃川が北へ向かって流れている。信濃川の左右両岸には、肥沃な沖積地が広がり、沖積地の東側では東山丘陵と裾部に広がる沖積地、西側では西山丘陵と発達した信濃川の河岸段丘があり、市域を囲んでいる。左右両岸の河岸段丘や丘陵上には、東山丘陵の栖吉城跡、西山丘陵の三島谷城跡などの中世の山城跡が、河岸段丘から沖積地にかけては、東側では長岡城の縄張りを始めた堀直竒が居城した蔵王堂城跡、西側では上除館跡など、数多くの城館跡が所在している。

長岡城跡は、信濃川右岸の沖積地に立地し、ＪＲ長岡駅を中心とした現在の長岡市中心街にほぼ重なっている。地形は、全体としてはやや平坦であるが、本丸跡地のＪＲ長岡駅付近から城外へ向かっては若干傾斜している。標高は約21～22mである。

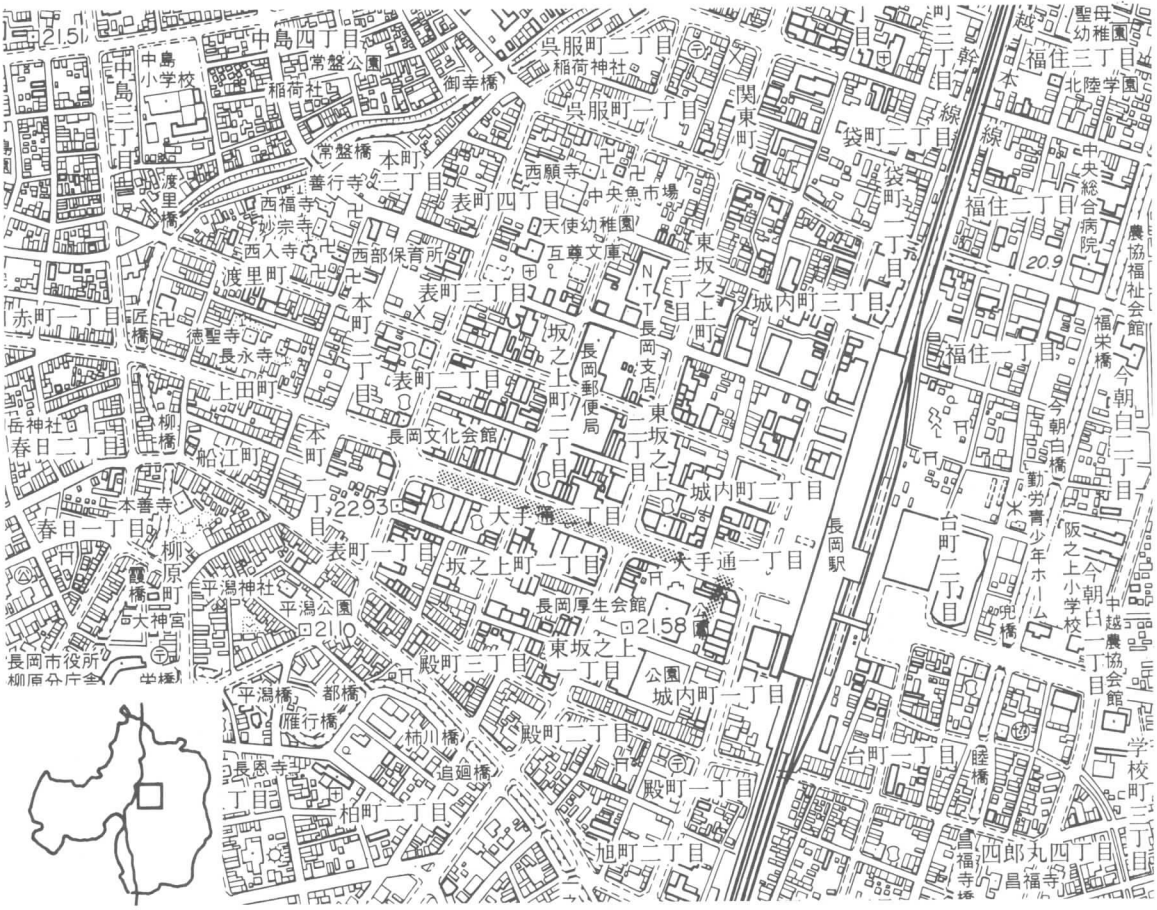
長岡城跡は、北越戊辰戦争による落城後、明治31年（1898）に開業した北越鉄道の長岡駅舎が本丸跡地に建設されたのをはじめ、明治期における都市の近代化で堀が埋め立てられるなど、長岡城に関わる大半の施設は取り壊された。そして、第２次世界大戦時の空襲で長岡市の中心部は壊滅状態になったが、その後の目覚ましい復興で、現在ではＪＲ長岡駅を中心に銀行、証券会社、デパートなどのビルが立ち並ぶ経済の中心地となっている。このため、現地表面では長岡城の堀や土塁等の遺構は見ることはできず、かつての長岡城の面影を留めるものには、長岡厚生会館脇にある縄張り伝説に由来する「城内稲荷神社」と、長岡駅周辺の「城内町」、今回発掘調査の対象地となった「大手通り」などにその名を残すのみである。

第１図　長岡城跡位置図（1/50000　長岡）

（2）長岡城の歴史

南北朝の動乱期、古文書にその名がたびたび登場する蔵王堂城に、長岡城の縄張りをした堀直竒が在番したのは、慶長9年(1604)ごろ、堀鶴千代の後見役を努めたのが最初である。そして、直竒は慶長10年ごろ以降に、蔵王堂城から約1㎞隔てた地を中心に、長岡町の開発を始め、長岡城の縄張りに着手したようである。蔵王堂城は、信濃川の川岸に面していたため、たびたび川欠などの水害を被った。そのことが、居城を移す契機となったと伝えられている。その後、直竒は慶長15年(1610)に信州飯山に転封となり、蔵王堂城には、堀氏に代わって越後に入部した松平忠輝の重臣、山田勝重が在番する。しかし、忠輝は元和2年(1616)に改易されたため、再び堀直竒が蔵王堂城主として入部した。このころから直竒は寺院の移転をはじめ、積極的に長岡の町作りを推進した。しかし、それもつかの間、翌々年の元和4年4月に、長岡城の完成をみないままに越後本庄(村上市)に転封となり、これをもって直竒と長岡の関係は断たれることとなった。

堀直竒が本庄に移封した後、越後長峰城(吉川町)から牧野忠成が6万2千石の藩主として入部し、直竒が始めた築城工事を受け継ぎ、長岡城と町作りを完成させた。そして、慶応4年(1868)の北越戊辰戦争の落城で城の機能が失われ、明治3年(1870)に長岡藩が廃藩になるまでの約250年にわたって越後の譜代大名として長岡の地を治めた。牧野氏が去った後は、明治31年(1898)の北越鉄道の長岡駅舎が本丸跡に建設され、駅舎周辺から近代都市への脱皮が進むにつれ、長岡城の面影は消えていった。



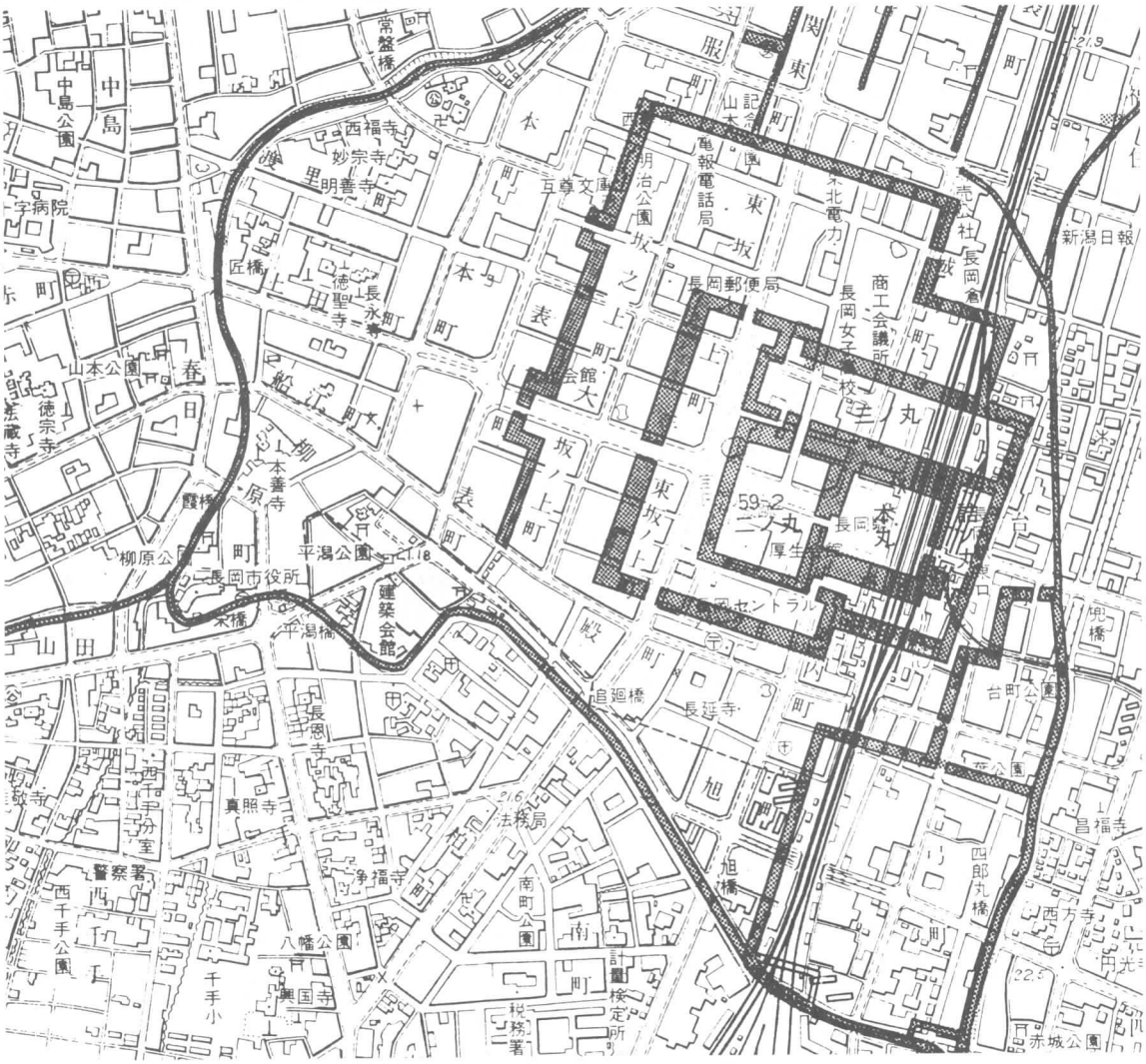
第2図　発掘調査調査対象地周辺の地形図（1/10000）

2　長岡城の縄張り（第３図）

長岡城の築城には「白苧（しらお）をくわえた一匹の白狐が何処からともなく表れて、雪の上を跳ね回った。その跡には兜の形が描かれていた。それを基に城の縄張りが行われた」と言う話が伝えられている。

長岡城の構えは、その築城伝説や縄張りから「苧引形兜城」あるいは「八文字構浮島城」とも呼ばれている。本丸は内郭のやや東側に偏って位置し、東には詰の丸、西に二の丸、そして三の丸を詰の丸から本丸、二の丸の北側に配した「梯郭式」を基本とした近世城郭である。城の東には栖吉川、西には信濃川が流れ、それを自然の外郭とし、柿川（赤川）から水を引き込み、内郭に複数の堀を巡らしている。本丸の一部に石垣を用いているほかは、土塁が内郭の各郭を囲んでいた。本丸に天守閣はなく、北西に三階隅櫓、二重櫓、多門櫓などを設けていた。二の丸には御殿と籾蔵、三の丸には武器役所と武器庫などがあった。

城の規模は、正保年間（1644 ～ 48）の「長岡城下絵図（内閣文庫蔵）」によると、本丸は東西 43 間、南北 53間（約78 ｍ×97 ｍ）、二の丸は45 間×51 間（約81 ｍ×92 ｍ）、詰の丸は22 間×51 間（約40 ｍ×92 ｍ）である。主な土塁は、１丈５尺（約４.５ｍ）、１丈２尺、７尺５寸の高さで、堀は幅31間～34間、深さ１丈５寸～８尺である。大手から本丸の間には、大手門・桜門・二之門・冠木門（かぶきもん）・九間門が、



第３図　長岡城跡縄張図（1/10000）

（「新潟県遺跡地図　昭和 54 年度版」から転載　網掛け部分が堀跡・水路）

裏門には塩門・皀莢門（さいかちもん）・不明門（あかずのもん）・太鼓門が、外郭には町口門・坂口門・千手口門・高橋口門・長町口門・神田口門・四郎丸口門・今朝白口門などがあり、その数は17門である。基本的な城下の町割は、内郭の北側に家中屋敷、西側に町屋と寺院、南側に中間町などが配置されていた。

3　調査の経緯

（1）これまでの主な調査

長岡城は、近世の遺跡であることや、北越戊辰戦争と第2次大戦時の空襲で長岡城のあった市街地が壊滅状態になったため、埋蔵文化財の発掘調査の対象になりにくく、長岡駅舎の東西口を結ぶ地下通路の工事の際に石臼などがわずかに採集されたり、本丸の一部に築かれた石垣の石が検出されたと言うことを伝え聞く程度である。長岡城跡の本格的な発掘調査は、昭和52年（1977）に新潟県教育委員会が上越新幹線の長岡駅舎の建設に伴って行った調査が最初である。この調査の内容は、報告書が刊行されていないため詳細は不明であるが、本丸南の堀付近を発掘し、石垣が築かれた堀の一部を確認した。遺物は、唐津焼・伊万里焼・瀬戸焼などの陶磁器と、石臼や木製品など出土している。その他に中世の珠洲焼の破片が2点あり、長岡駅付近が中世の生活域であったことが考えられていた（新潟県『新潟県史』通史編3　近世一　1987年）。その後、昭和59年（1984）に駅東口の越後交通ビル（ダイエー）の建設と長岡駅西口広場（バス駐車場など）の整備事業、昭和62年（1987）の長岡駅前城内地区市街地再開発組合のビル（イトーヨーカドー丸大）建設に伴い発掘調査を長岡市教育委員会が行った。

越後交通ビルの発掘調査では、本丸・詰の丸と三の丸を区画するT字形の堀跡を検出し、西口広場の調査では本丸と三の丸の間の堀跡を発掘した。1987年の発掘では二の丸と三の丸との間の堀のコーナーを検出し、絵図面に描かれた城の縄張りの一部を確認した。

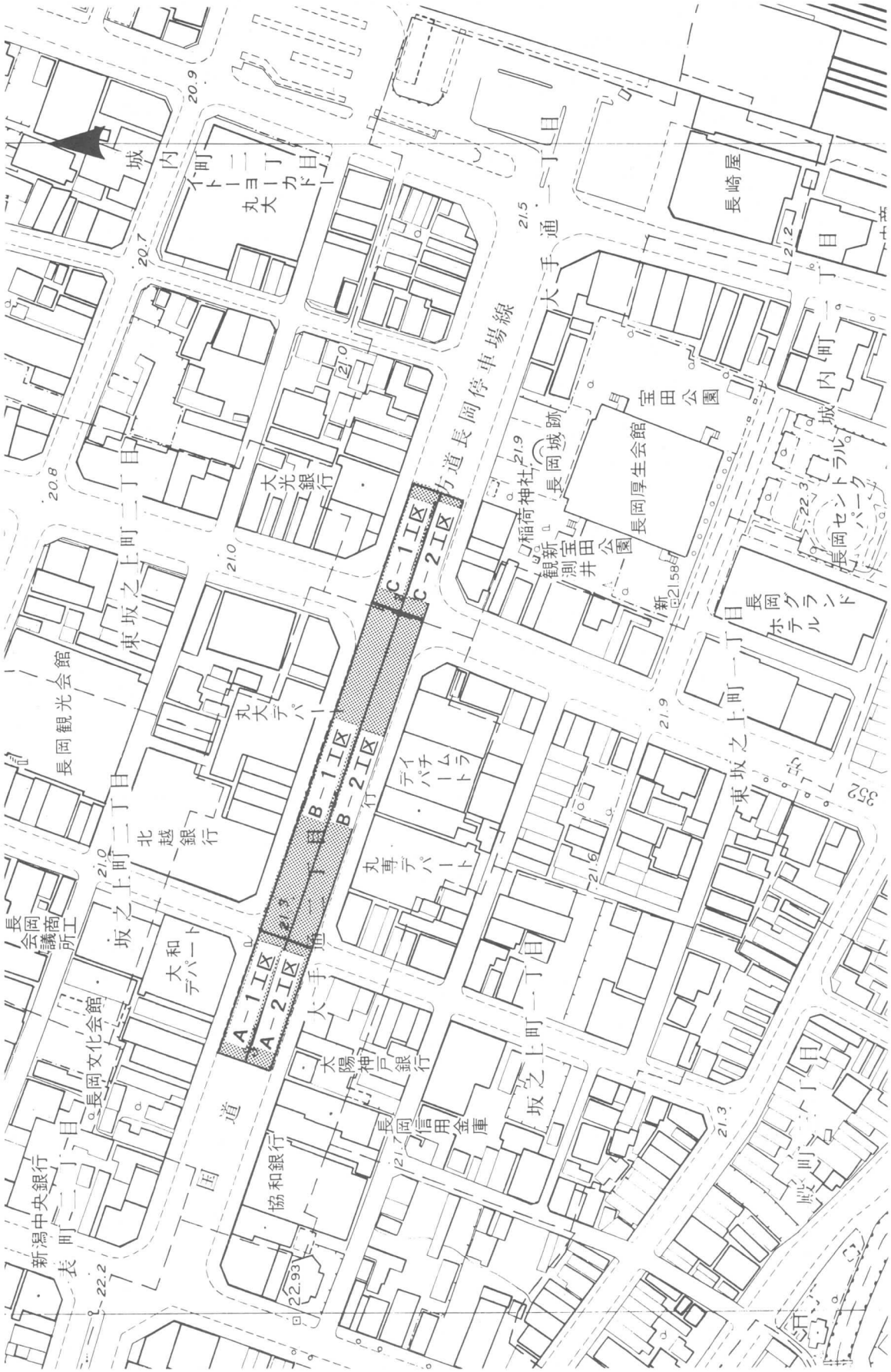
なお、1984年の越後交通ビルに伴う発掘調査では、明治期の都市の近代化による開発や戦後の再開発などで、遺構は堀跡以外には確認できず、しかも堀跡も地下1.5ｍ付近で確認できるなど、遺構の遺存状況が極めて不良であることが判明した。長岡市教育委員会は、この知見を基に新潟県教育委員会と協議を行い、その後の長岡城跡の発掘調査では、内郭の堀に囲まれた内部で行うことを基本とすることとした。これにより、長岡郵便局の本局の立て替えなどに伴って発掘調査を実施したり、個人ビルなどの建設やアーケードの建設などには立ち会い調査を行ってきた。

（2）大手通り地下駐車場建設に伴う発掘調査

①調査に至る経緯

平成4年（1992）4月末に、新潟県長岡土木事務所から長岡駅西口の大手通りに地下駐車場を建設する計画について説明があった。これが、本件の発掘調査についての最初の協議である。この協議で長岡市教育委員会は、計画地には長岡城跡が位置するので、発掘調査が必要であること、地下駐車場の建設は新潟県が事業主体であるので新潟県教育委員会に調査依頼をすることなどを口頭で回答する。そして、5月初めには新潟県教育庁文化行政課を交えた三者で協議を行い、文化行政課からは長岡市からの要望で事業を実施する性質上、長岡市教育委員会が発掘調査を行うようにとの話がある。その後、建設計画そのものが一時中断していたこともあり、事業主体の長岡土木事務所との協議は、平成6年4月まで中断した。

再開後の協議では、大手通り地下駐車場の建設が決定し、計画から実施に向けての諸準備が本格的に始まったことが伝えられ、発掘調査の調査主体についても話し合われた。平成6年6月末の協議で、新潟県



第4図　発掘調査区図（1/2500）

長岡土木事務所から発掘調査について口頭で依頼があった。これに対し、長岡市教育委員会は平成6年から8年度までは市内栖吉町中道遺跡の発掘調査を予定しており、長岡城跡の発掘調査を行うには人的に不備であるが、地下駐車場の建設は長岡市からの要望でもあり、調査主体を引き受けることで決着した。6月の協議では、工事に着手する60日前までに文化財保護法に基づく諸手続きを行うこと、および発掘調査計画は建設計画が煮詰まってから、工事の工程に沿った形で計画することなどを申し添えた。

明けて平成7年1月から3月までの間に、建設予定地内にあるガス管や上下水道管、それに電話線などの埋設管を移設する工事が始まった。長岡市教育委員会は、幅約1ｍの埋設管移設工事を試掘調査と位置付けて、調査対象地の地下の様子を探ることにした。この結果、旧国道8号線などの大手通り地下駐車場は、昭和30年代の道路改良工事などで路面から1ｍほどが削平されていることや、昭和59年の調査の成果などと併せて考えると、地下駐車場の建設予定には地下数メートルにおよぶ堀跡以外に遺構が存在する可能性は極めて低いと判断された。このため、地下駐車場建設に伴う長岡城跡の発掘調査は、堀跡の位置と規模を探ることを主目的に実施することとした。なお、今回の発掘調査の調査地は、長岡城の絵図面、それに基づいた『新潟県遺跡地図（昭和54年度版）』から、二の丸と家中屋敷（武家屋敷）とを隔てる堀、および大手門付近の堀が確実に調査区域に含まれ、それに家中屋敷と町屋を区切る町口門に該当する部分が検出される可能性があることなどが予想された。

②発掘調査の経過　（第4図）

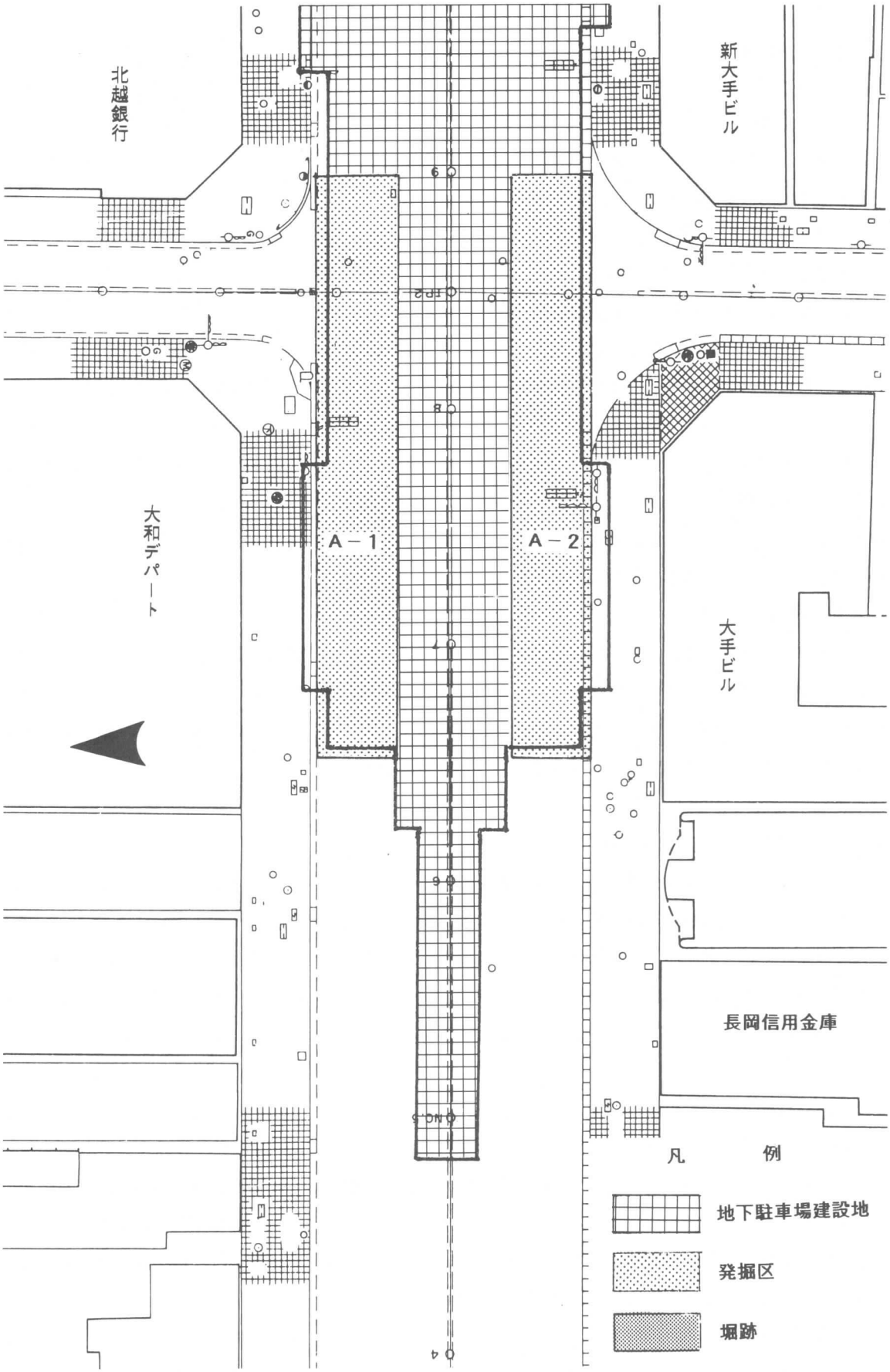
地下駐車場の建設工事は、大手通り西側のＡ工区、東側のＣ工区、中央部のＢ工区の大きく三分割し、さらに大手通りの南・北側と中央部に三分割した工区の、9工区に分けて行う行程が計画された。発掘調査は、工事の行程に沿った形で進めることにし、発掘調査を平成7年9月から平成8年5月までの、4次に分けて行った。発掘は、まず道路舗装面をカッターで切り取り、舗装のアスファルトやコンクリートと路盤材までを撤去し、その後に遺構の確認作業を行い、遺構―この場合は堀跡―の平面を調査し、堀跡の横断面の形状と覆土の状況を調査した。なお、大手通りは道路工事などで数度にわたって掘削が行われており、当初の予想どおり堀跡以外には確認できなかった。

・第1次発掘調査（平成7年9月13日～10月18日）

第1次調査は、Ａ―1工区とＣ―1工区を対象に実施した。Ａ―1工区は、地下駐車場の西側で、町口門付近の堀が想定された箇所である。残念ながら町口門付近の堀は、建設予定地よりも西側に当たっていたためか、検出されなかった。また、道路の側溝や屋敷跡などの遺構も道路改良工事などで削平されたためか、検出することはできなかった。

Ｃ―1工区は、長岡駅側に設定された工区で、二の丸と家中屋敷（武家屋敷）とを隔てる堀跡の存在が想定された箇所である。調査では予想どおり南北に走る堀跡が発見されたが、東側の天端―本丸側の天端は調査対象地から外れており、西側の天端しか確認することができなかった。

この堀跡の基底部の下で、枠板をもつ井戸跡が1本発見された（第1号井戸跡）。井戸跡は堀底より下で、堀の掘削で井戸枠の上部が壊されていたことから、長岡城が築かれる以前―中世の井戸跡であると推定された。第1号井戸跡の調査後に、第1号井戸跡からやや離れたところに、第1号井戸跡と同じ木製の枠をもつ3本の井戸跡が1ｍ内外のところに固まって検出された（第2号～第4号井戸跡）。第2号・第4号井戸跡から珠洲焼が出土し、井戸跡が中世との推定を裏付けた。本丸跡の長岡駅の地下通路などで珠洲焼の破片が採集されており、その付近が中世の生活域であったことが推察されていたが、堀底での井戸



第5図　発掘調査区（A工区　1/500）

跡跡の発見でそのことがより確実なものとなった。

・第２次発掘調査　（平成７年11月22日～12月７日）

第２次調査は、第１次調査区とは反対の南側のＡ―２工区、Ｃ―２工区を対象に行った。Ａ―２工区では、Ａ―１工区同様に遺構･遺物は発見されなかった。

Ｃ―２工区は、Ｃ―１工区で検出された南北に走る堀跡の延びが確認された。しかし、ここでも発掘区から外れているのか、堀の東側天端は確認できなかった。

・第３次発掘調査　（平成８年２月26日～２月29日）

地下駐車場予定地の中央部に当たるＢ―１工区を対象に、第３次調査を冬季間にもかかわらず実施した。調査対象地は、大手門付近の堀が想定された箇所である。そして、礎石や掘立柱穴跡など、大手門に付属する諸施設、遺構が発掘される可能性が残されていた場所でもあった。なお、発掘面が降雪のためにドロドロになり、調査の効率が悪い冬季間にあえて発掘を行ったのは、建設行程にできるだけ支障を与えないことと、降雪後の排雪に万難を配する態勢が整備されていたことから実施に踏み切った。

発掘から堀は徐々に南側に向かって階段状に狭くなっていることを確認したが、絵図面に描かれている大手門で堀が途切れると推定した部分は確認されなかった。また、大手門の遺構も既に削平されているためか、検出できなかった。堀は途切れないのか、あるいは大手門は現在の大手通りより南側に位置したのかなどは、第４次発掘調査を待つこととした。

・第４次発掘調査　（平成８年５月15日～31日）

大手通り地下駐車場建設に伴う発掘調査は、Ｂ―２工区の第４次発掘調査で終了した。第４次発掘調査の主な目的は、第３次調査で課題になった大手門付近の堀の状況を確認することであった。第４次調査で大手門付近の堀の続きを検出し、しかも堀が階段状に徐々に狭くなっていることを調査したが、堀が完全に途切れるのかどうかを調査区域内で確認することはできなかった。

４　遺　　構（第５図～第13図）

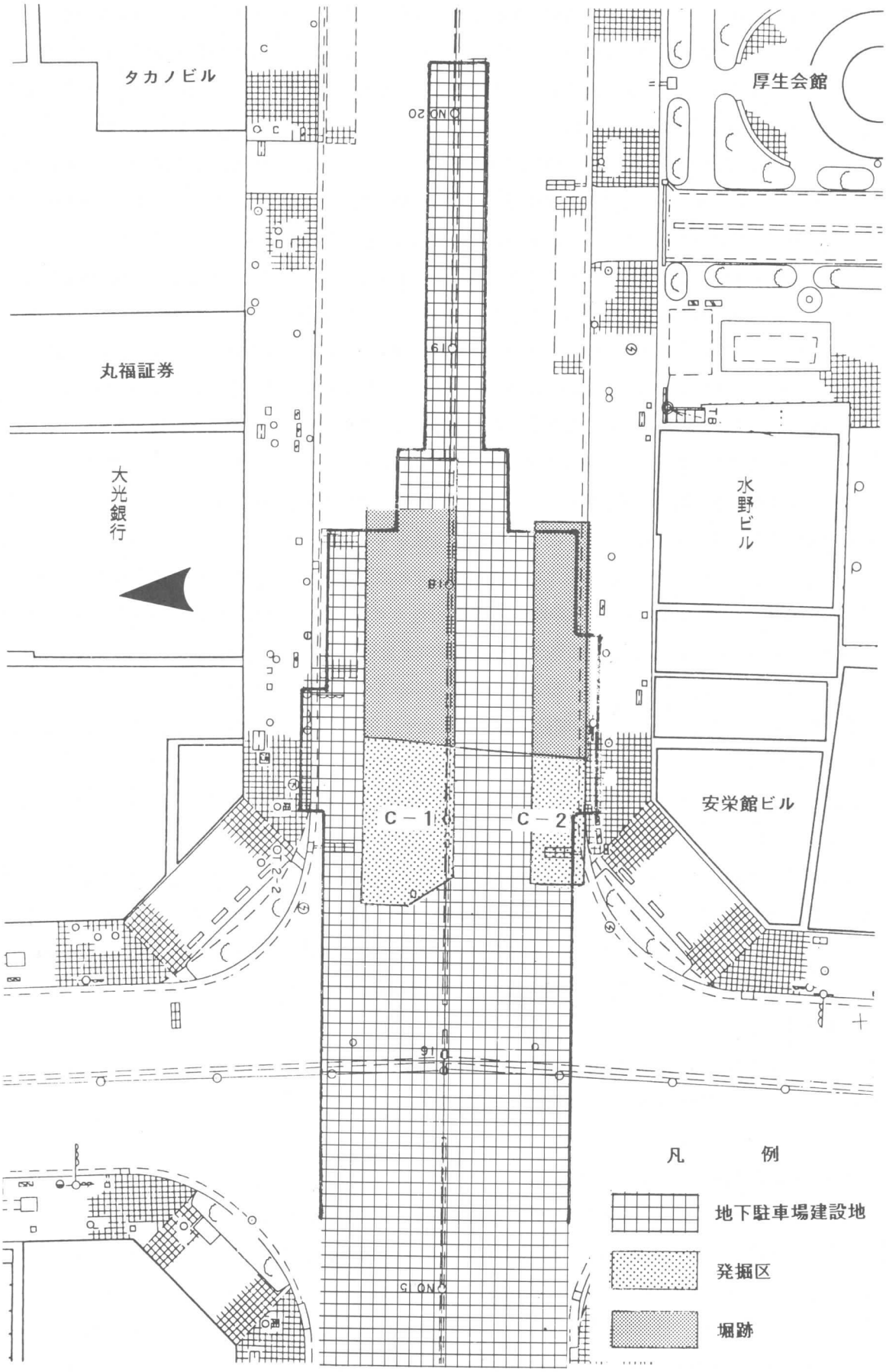
大手通り地下駐車場建設に伴う今回の発掘調査では、長岡城の堀が２本確認された。また、二の丸と家中屋敷との間にある堀跡の底部から、堀の掘削で上部が削られた中世の井戸跡が４本発見された。井戸跡の発見は、長岡城が無住の地に築城されたのではなく、町屋などの建物があった所を立ち退かせて築かれたことを物語っている。しかし、舗装した道路下での発掘調査であったことなどから地下深く掘られた施設（井戸や堀など）以外の、例えば大手門の柱に関わる遺構などは既に削平され、検出することはできなかった。

（１）近世の遺構（第５図～第９図）

長岡城の直接的な施設の痕跡－遺構としては、絵図面やそれを基にした『新潟県遺跡地図（昭和54年度版）』から調査以前に予測していた、二の丸と家中屋敷（武家屋敷）との間を南北方向に走る堀跡（以下「二の丸の堀」とする）、大手門付近の堀跡の２本が、それぞれＣ工区、Ｂ工区で推定どおり確認された。しかし、Ａ工区の西端に想定された町口門付近の堀跡は、掘削深度が浅い地下駐車場へのスロープ部分に当たるため、掘り下げることができず、確認することはできなかった。

①二の丸の堀跡（第６図・第７図）

二の丸の堀跡は、路面下80㎝～１ｍの位置で検出された。検出位置が低いのは、道路の舗装と路盤材の厚さ、それに昭和初期に敷設された下水管、それに覆土が撹乱を受けていたためなどである。二の丸の堀



第6図　発掘調査区（C工区　1/500）

跡は、西側の天端は確認できたが、東側は発掘区から外れているためか、確認することはできなかった。西側の天端は、地山の黄褐色土を掘り込んでいた。また、C—1工区の覆土断面の4カ所に、若干性質の異なる覆土を掘り込んだ境界線が見られる。西側から地山の黄褐色土と①の黄土色粘土と暗青灰色粘土のブロックの覆土との境界線（第1次）、①の覆土と②暗青灰色粘土と黄土色粘土のブロックの覆土との境界線（第2次）、②の覆土と③暗青灰色粘土と小石などが混ざった覆土との境界線（第4次）、それに③の覆土と④黄土色に変色した青灰色粘土の覆土の境界線（第4次）である。4カ所の境界線は、西から東の順に掘り込まれていると観察され、二の丸の堀が4次にわたって掘り返されたと判断された。

長岡城に関しては、数種の絵図面が残されているが、最新の絵図面と思われる慶応年中の絵図面には、それまで存在しなかった馬場が二の丸の堀を挟んだ家中屋敷側に描かれている。二の丸の堀が4回も掘り返されているのは、慶応年中の絵図面に登場する馬場を設けるために、堀を埋めていった結果であろうか。

なお、C—1工区で見られた覆土の状況は、C—2工区でも観察できるところであるが、堀の基底部が西に向かって立ち上がっていることは確認できたが、堀跡の覆土が撹乱を受けている箇所が多いことと、C—2工区の発掘を、覆土断面に水滴が常時滴り落ちる状況の雪やみぞれが降る12月に行ったことなどのため、断面の詳細な観察は困難を極めた。C—2工区での堀の西天端の確認は、C—1工区で確認した第1次堀の西側天端とほぼ同じラインを基に辛うじて推定するに止まった。

ところで、慶応年中の絵図面には、二の丸の堀幅などの書き込みが見られる。それによると、二の丸の堀幅は、北側で13間（約23.4ｍ）、南側で11間（約19.8ｍ）である。今次発掘の限界線は、西側天端から約20ｍのところであり、絵図面に書き込まれた堀幅と対比すれば、最終的な堀である第4次の堀跡の東側の天端は、発掘区の限界線—地下駐車場の本体部分から外れるために確認できなかった。

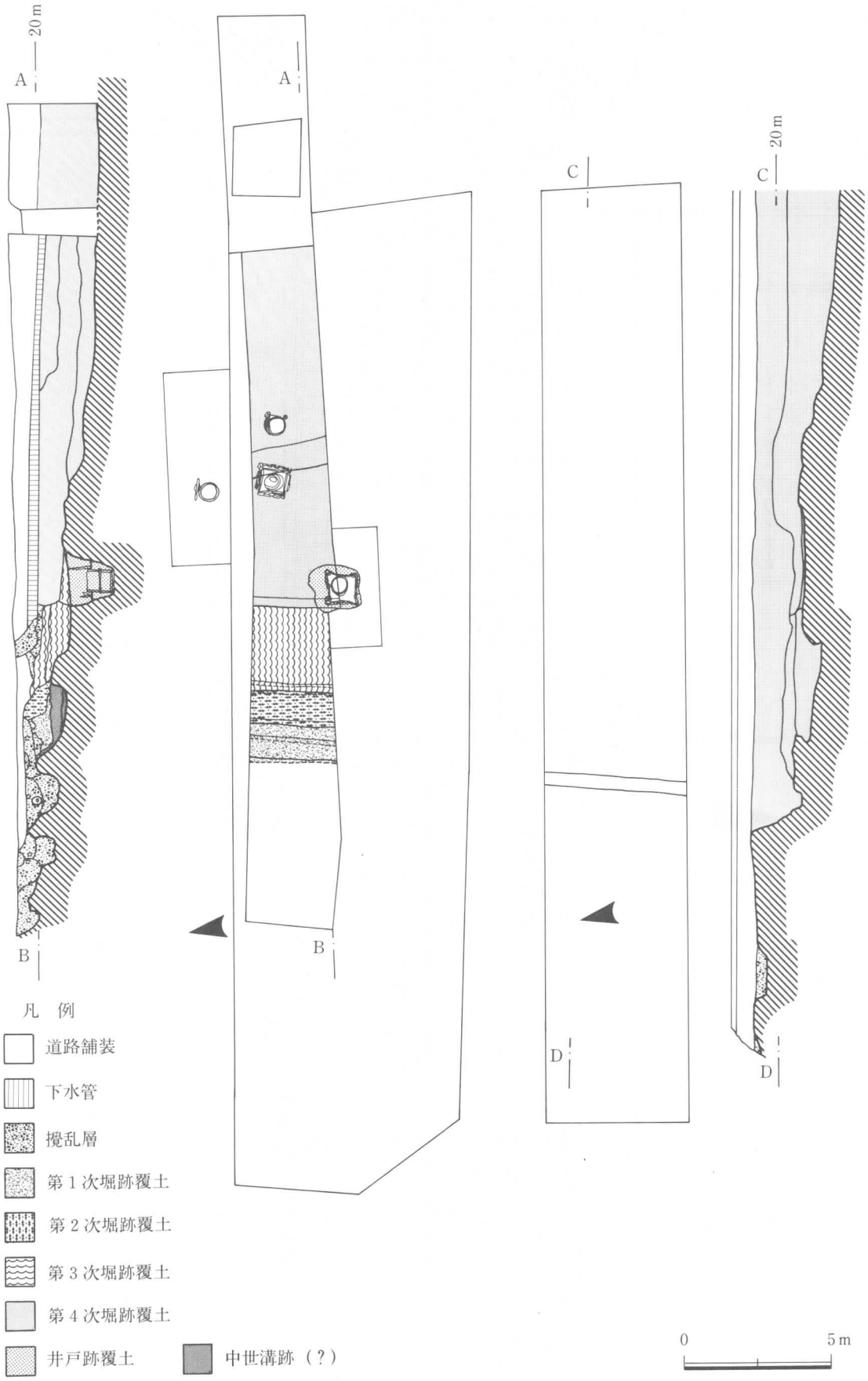
堀の基底部の状況は、第1・2次の堀は路面下1.2ｍでほぼ水平に、第3次堀は階段状に50㎝ほど下がり、第4次堀は路面下1.5から3ｍ(標高約17.8ｍ)と、最深部に向かって緩く傾斜している。おそらく、長岡城が築かれた当初の二の丸の堀は、家中屋敷側では階段状に掘り込まれ、最終的な第4次堀では緩く傾斜するように掘り込まれていたと思われる。

また、第1次堀の基底部の下に、黄土色粘土に暗青灰色粘土の大きなブロックが混ざった土層と、その下に木質を含む植物質の薄い層が溝状に堆積していた。第1次堀の下にあるところから長岡城築城以前の溝跡の可能性が高い。第1次堀の西側にも溝状の落ち込みが2カ所見られるが、第1次堀のすぐ西の落ち込みは、下水管の掘り込み、発掘区西側の落ち込みは上の土層が乱れており、近・現代の掘り込み—撹乱の痕跡と思われる。

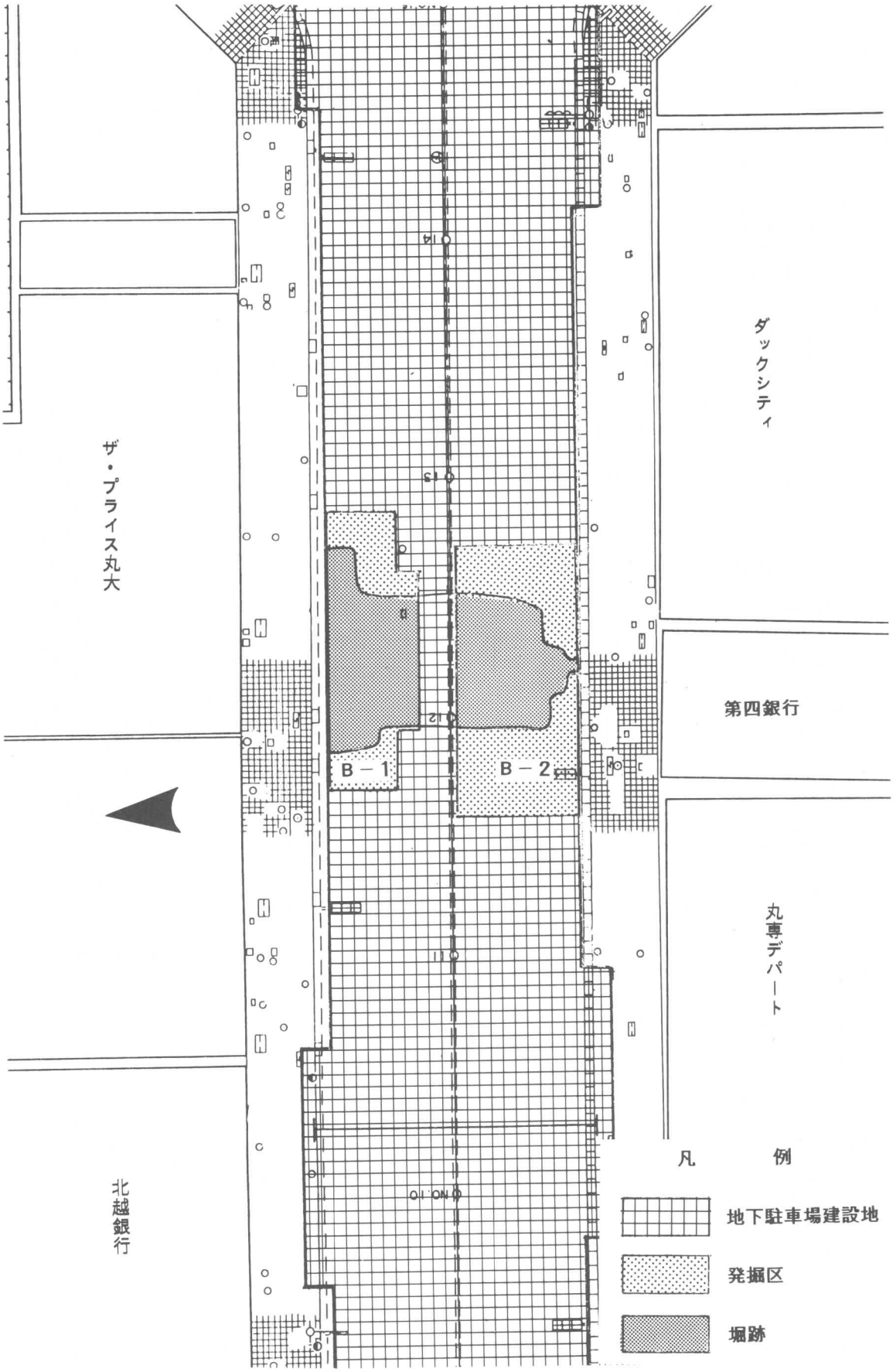
二の丸の堀跡の覆土から遺物は全く1点も出土しなかった。覆土と路盤材との間にズックや地下足袋の底などが出土した程度である。

②大手門付近の堀跡　（第8図・第9図）

大手門付近の堀は、絵図面等からB工区に位置するものと推定されたため、道路の両脇に幅2ｍのトレンチを設けて確認作業を行った。堀の確認面は、浅いところで路面下80㎝、深いところで2.5ｍに位置する。次に、確認された堀の周辺を広げて平面の広がりを精密に調査した。この付近は、撹乱を受けている箇所が多く、堀の天端の確認は困難であった。堀の平面は、北から南に階段状に狭くなっている。もっとも幅の大きい北側では約16ｍ、次の段階で約12ｍ、発掘南端に近いところで4ｍ、そして南端で約1ｍと極端に狭くなっている。堀幅が狭くなるにつれて堀の深さも浅くなり、堀幅16ｍの箇所で路面下4ｍ、幅



第７図　二の丸の堀跡（1/200）



第8図　発掘調査区（B工区　1/500）

第9図　大手門付近の堀跡（1/200）

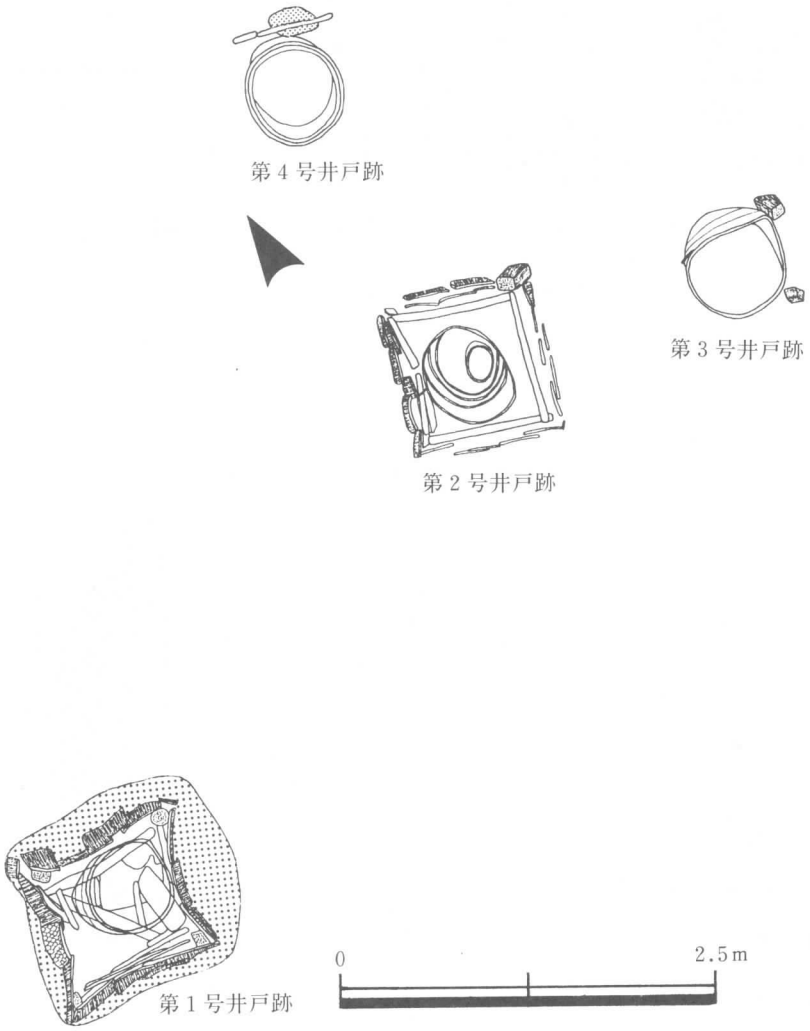
12ｍの箇所で3.7ｍ、最も狭いところで2.5ｍである。標高では16ｍ幅が17.8ｍ、12ｍ幅で約18ｍ、最も狭い箇所は19ｍである。二の丸の堀と大手門付近の堀の最深部の標高は同じである。堀の横断面―堀の掘り形は、レンズ状の掘り込みが基本であるが、堀幅が12ｍから4ｍに極端に狭くなるＢ―２工区のＡ―Ｂラインでは東側で若干階段状になっていた。北から南へ堀が浅く、幅が狭くなっているのは、おそらく大手門で堀が途切れるのか、若しくは大手門そのものの下で暗渠になっていたためであろうか。いずれにしろ、Ｂ工区で確認した堀跡は、大手門に近接していると考えられる。しかし、掘立柱穴跡や礎石などの大手門を支えた柱などの基礎は確認できなかった。道路工事などで既に大手門の施設は失われたものと思われる。遺物は、堀の基底部から唐津系の碗が１点出土しただけであった。

（２）中世の遺構（第10図～第13図）

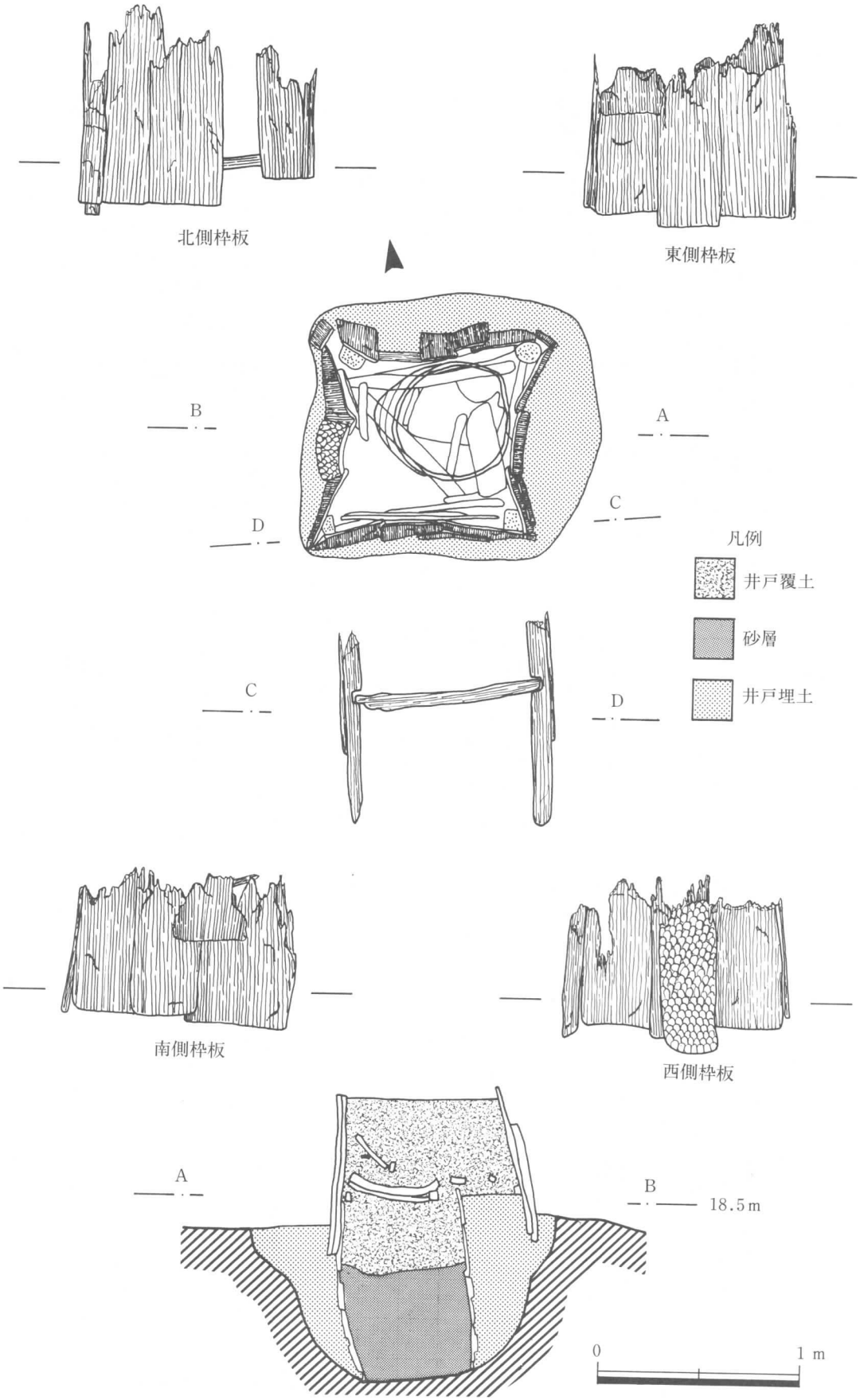
Ｃ―１工区の二の丸の堀底で木製の井戸枠をもつ４本の井戸があった。第１号井戸跡が二の丸の堀の断面で見られるように堀の掘削で上部が削り取られていること、第２・４号井戸跡から珠洲焼が出土したことから中世の井戸跡と判断した。

・第１号井戸跡（第11図）

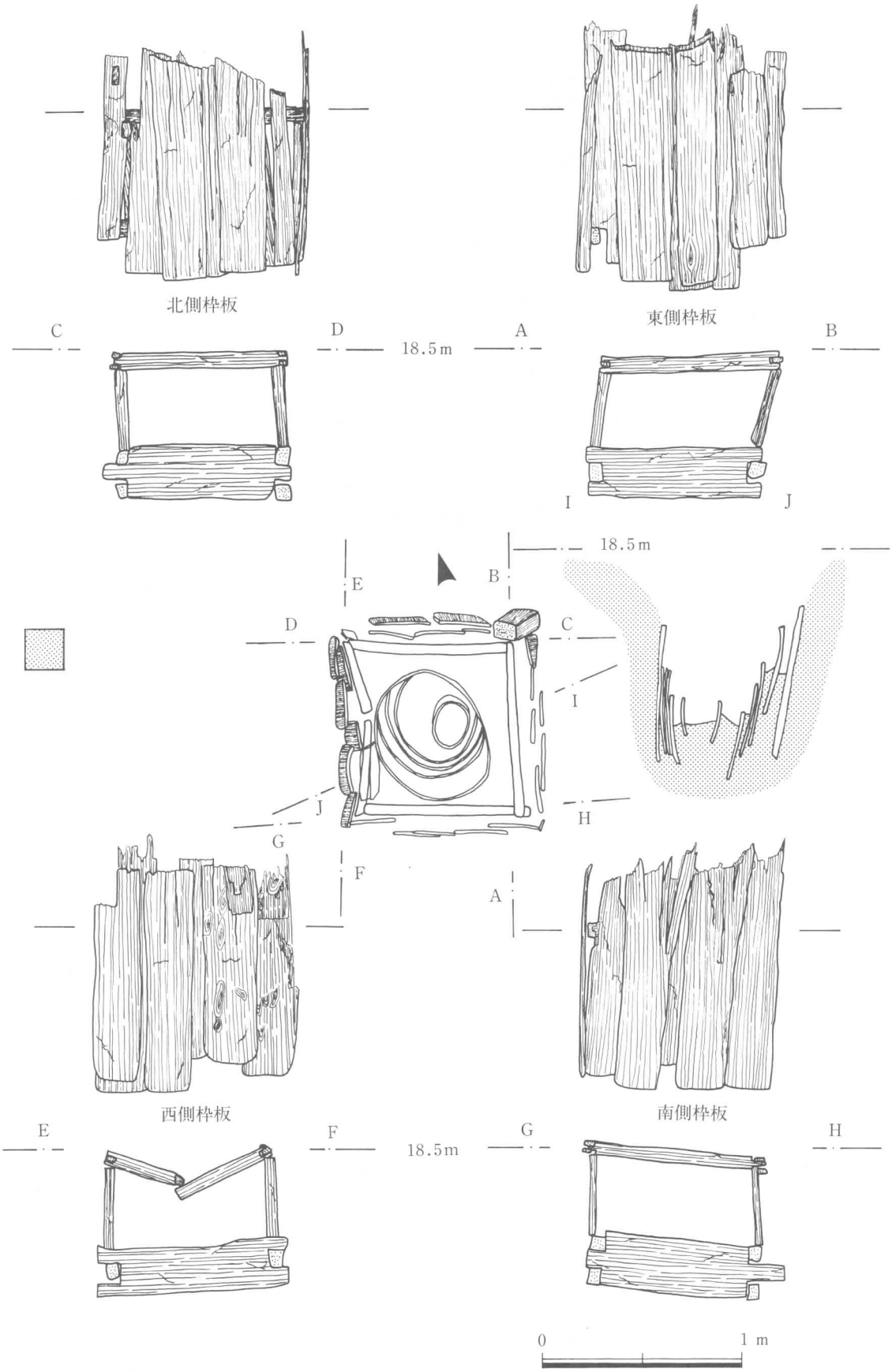
二の丸の堀の掘削で井戸枠の上部が削り取られた井戸跡である。井戸の掘り形は、堀の断面に見られる部分―井戸の中央部付近で約1.5ｍ、砂層で平面的に確認できたところでは南北約1.2ｍ、東西約1.3ｍ、南の膨らんだ所で約1.5ｍである。第１号井戸跡の構造は、最下部に直径約60㎝、高さ約15～25㎝の曲物を、全体の高さ約80㎝の井筒として埋め込み、井筒を囲むように一辺約１ｍの方形の角に約６㎝角の隅柱を打ち込み、約６㎝角の桟木で隅柱をつなぎ、そこに厚さ約６㎝、幅約30～60㎝の板材を数枚重ねながら、縦に立て掛けて囲い、さらに上にも積み重ねて



第10図 井戸跡位置図（1/50）



第11図 第1号井戸跡（1/30）



第12図 第2号井戸跡（1/30）

枠板としている。井筒と掘り形との隙間には青灰色粘土が見られたが、本来の埋め土は井戸を掘った土であったものが、井戸内の帯水で変色したものと思われる。井筒の組み合わせは、蛇腹式ではなく、1個づつの曲物を積み重ねたものである。隅柱と桟木の組み方は、ほぞ穴を穿った隅柱に先端をほぞ穴に合うように加工した桟木をはめ込んでいた。枠板に手斧の加工痕が見られた。井戸の内部―井筒の上に井戸枠の構造材と思われる部材が転落していた。それ以外には遺物は出土しなかった。

・第2号井戸跡 （第12図）

第1号井戸跡からほぼ東に約3ｍ離れたところに位置していた。第2号井戸跡の掘り形は確認することはできなかった。井戸の構造は、高さ約36～44㎝、直径約30～60㎝の曲物を4段―蛇腹式に埋め込み、厚さ約6～9㎝、高さ27㎝の板材を一辺90㎝の井桁に組んで底枠板とし、その上に約6㎝角の隅柱を立て、隅柱の上を約9㎝角の桟木を井桁に組み、厚さ約3㎝、幅約25～30㎝の板材を重ねながら枠板としている。第2号井戸の構造は、第1号井戸跡とほぼ同じであるが、井筒が直径の異なる4個の曲物を蛇腹式に重ねている点と、井筒を囲む隅柱が底枠板の上にあって立てられている点などに違いが見られる。底枠板の組み方は、東西の2枚が凹状に、南北の2枚を凸状に切れ込みを入れて井桁状に組んでいる。隅柱の上にある桟木も底枠板と同じ切れ込みを入れて井桁に組んでいる。そして、隅柱と底枠板、隅柱と桟木との組み方は、ほぞなどの加工はなく、底枠板の角に隅柱を立て、隅柱の上に桟木を乗せているに過ぎない。第2号井戸跡には構造材などの部材の転落はなかったが、珠洲焼の甕・擂鉢の破片と、鉄製のカスガイ、それに井筒内部の覆土から直径約20㎝、高さ約20㎝の曲物が出土した。

・第3号井戸跡 （第13図）

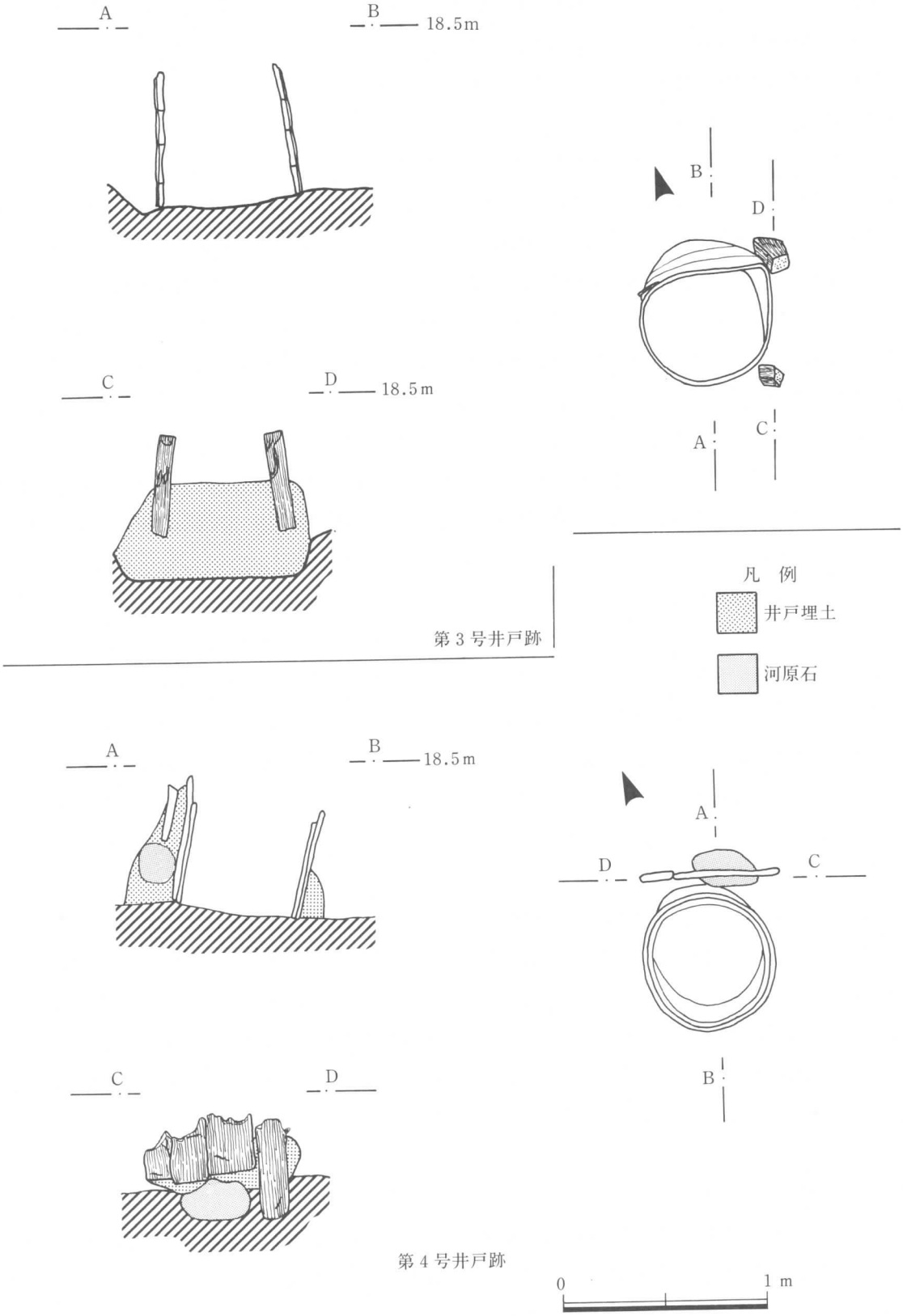
第2号井戸跡から約1ｍ東に位置していた。南北の隅柱間で確認できた第3号井戸跡の掘り形は、砂層の中で約1ｍ幅に広がる青灰色粘土であった。第3号井戸跡は、直径約60㎝、高さ約15～20㎝の曲物を4段に重ねた井筒と、北東と南東にある約9㎝角の隅柱の2本だけである。桟木や枠板はなかった。しかし、井筒が埋め込まれていたこと、隅柱が存在することから、第1・2号と同様に枠板で囲まれた井戸であったか、あるいはそれを意識して井戸を作っていたものの不都合があって工事途中で放棄したものであろう。第3号井戸跡からは鉄製の刀子が1本出土している。

・第4号井戸跡 （第13図）

直径約60㎝で高さ50㎝の曲物と直径約66㎝、高さ60㎝の曲物を2個重ねて井筒にした第4号井戸跡は、第2号井戸跡から北に1.2ｍのところに位置していた。第3号とは約2.5ｍ離れている。残存する井戸の構造は、井筒と厚さ約5㎝、幅約15～25㎝の枠板が4枚だけであった。枠板は、1枚が深く埋め込まれていたが、3枚は35×10㎝の礫があってか、埋め込みは東の枠板に比べて浅い。第4号も第3号と同じく、井戸枠を備えた井戸であったか、工事中に放棄した井戸跡と考えられる。第4号からは珠洲焼の鉢と、小刀が1本、それに曲物の蓋が1枚出土している。

5 遺　物 （第14図）

今次調査で出土した遺物は、井戸跡からの珠洲焼などの中世の製品と、大手門の堀跡の基底部で検出した近世磁器の碗が1枚だけであった。堀跡から近世の遺物が大量に出土する期待があったが、明らかに長岡城が、長岡の政治・行政の中心として機能していた時代の遺物は、前に上げた碗のみである。堀の覆土上面などからは、陶磁器や瓦などが出土したが、同一の出土位置に地下足袋やズックの底、あるいはガラス製の薬ビンなどがあり、明治に入ってからの都市の近代化の開発で堀が埋められた後や、空襲後の整理



第13図 第3号・第4号井戸跡（1/30）

で投げ込まれたものと判断された。このため、堀の覆土上面などからの近代以降の出土品は、遺物として取り上げないことにした。

（1）近世の遺物 （第14図1）

明らかに江戸時代と判断される遺物は、大手門の南側堀跡の基底部付近から出土した碗だけである。碗は口径13㎝、高さ約4㎝。17～18世紀の唐津系の碗である。高台部は削り出し。碗には釉薬が薄くかけられている。まず、灰釉を内面の全面と外面の高台際までかけ、その上に緑釉をかけている。見込みの緑釉は、口縁付近から垂らすようにかけ、外面は口縁部全体にかけている。なお、内底見込みの灰釉は、焼成時の重ね焼きによる砂目積の部分が抜けている。

（2）中世の遺物 （第14図2～11）

第1号井戸跡を除いた3本の井戸跡からは、珠洲焼や曲物の蓋、カスガイ・刀子などの鉄製品が出土している。第2号井戸跡からは、珠洲焼の甕（2～4）と擂鉢（5・6）の破片と、カスガイが1点出土した。珠洲焼の甕は、外面に条線状の叩き目が、内面は無文の押え具によるくぼみがある。外面の条線状叩き目は、面取り風に重なっている。5の擂鉢は11条の卸目が、6の擂鉢の卸目は摩滅で読み取りにくいが8条ほどと思われる。珠洲焼の生産時期は、甕がⅣ期～Ⅴ期の14世紀後半から15世紀前半、擂鉢がⅣ期の14世紀後半と考えられる。カスガイは、厚さ5㎜にも満たない鉄の板を折り曲げたものである。

井筒と隅柱が残っていただけの第3号井戸跡からは、残存部の長さ約15㎝の刀子（8）が1点出土している。刀子はサビによる腐食が進んでぼろぼろの状態であった。

第4号井戸跡からは、珠洲焼の擂鉢（9）と曲物の蓋（10）、サビの腐食が著しい小刀（11）が1本出土した。珠洲焼の擂鉢は、口唇が平らで、残存部分の内面には卸目が見られないが、Ⅳ期―14世紀後半の擂鉢と考えられる。曲物の蓋は、対角線上の4カ所に2個一対の目を穿った直径約12㎝、厚さ4㎜の丸板に、対角線上の4カ所に1個づつの目が開けられた高さ約7㎜の薄板の返りが付いている。

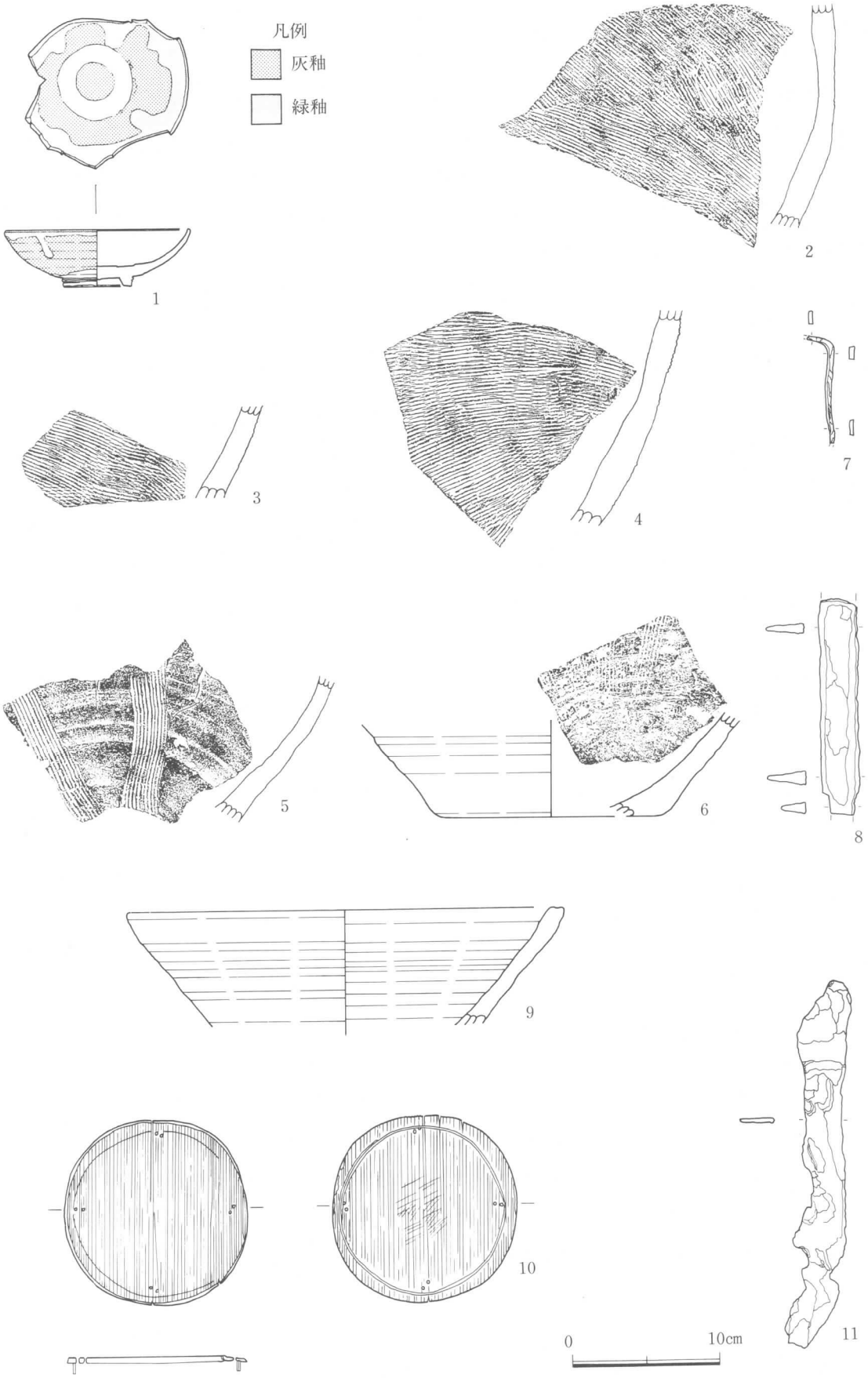
6 まとめ

（1）長岡城の堀について

調査前の予想どおり、二の丸の堀と大手門付近の堀の2本が確認された。二の丸の堀は、覆土の土層断面の観察から、慶応年中の絵図面に見える馬場を設けるために4回にわたって掘り返されていること、第1次から第3次の堀は、西の天端から階段状に堀底が掘られていることなどを確認した。しかし、発掘区―地下駐車場の本体部分から外れているために、東の天端を確認することはできなかった。

大手門付近の堀は、大手通りの北側から南側に向かって、階段状に法面を削りながら幅を狭くしていき、かつ浅くなっていた。絵図面などからは、この箇所に大手門が想定されるが、大手門を支えた柱の痕跡や基壇などの遺構は、確認できなかった。発掘された堀の状況から、堀幅が浅くかつ狭くなる箇所か、あるいは今回の調査では発掘区域外に当たる南側の歩道部分に大手門が存在した可能性がある。したがって、現在の大手通りは、廃城後旧大手門を旧町口門を結ぶ道を意識して作られた旧の大手通りの、北側を拡張したものと思われる。

堀が機能していた時代の遺物は、大手門付近の堀底からの17～18世紀の唐津系の碗が1枚だけである。堀底からの遺物が1点だけという現象は、軍事上重要な役割を果たす堀を、埋没させないように繰り返し浚渫したことを示していると思われる。堀を埋めた土砂―覆土の上面からは陶磁器の破片が若干量出土し



第14図 出土遺物（1/4）

ているが、前に述べたように同じレベルでズックや地下足袋の底、ガラス製の薬ビンなどが出土しており、明治以降に堀が埋められた後の投げ込みであると判断される。

今回の調査を含め、これまでの長岡城跡の発掘で確認された堀跡は5カ所ある。本丸・詰の丸と三の丸間のT字形部分、二の丸と三の丸との間のコーナー等である。今回の調査で確認された堀の位置は、コーナーなどの部分でなく、また天端の削平により堀幅の間数も確定できないことから、これまでの調査に比べて、少なくとも城の内郭の縄張りを復原するには若干データー不足と言わざるを得ない。今後とも都市の再開発などに伴って長岡城跡の発掘調査を継続し、現在の長岡の市街地と長岡城の縄張りとの整合性を探っていく必要がある。

（2）中世の井戸跡について

C―1工区の二の丸の堀底から、14世紀後半から15世紀前半の珠洲焼を出土した4本の井戸が発見され、従前から指摘されていたＪＲ長岡駅付近における中世遺跡の存在が裏付けられた。長岡市内で中世の井戸は、15世紀代の三貫梨館跡、松葉遺跡、中道遺跡などで素掘りの井戸があるが、木製の枠の井戸は長岡城跡で初めて出土した。時間的な偏差も考慮しなければならないが、素掘りと木製枠を伴う井戸には大きな違いがある。一般的に素掘りの井戸に比べて、木製の枠を据えた井戸を作ることは、経済的な負担が大きいと言われている。この井戸跡の発見から、この付近には経済的に力をもった町屋の存在が窺える。

ところで、第2号～第4号井戸跡は1ｍほどの範囲内に存在していた。井筒・隅柱・枠板などを備えていたのは第2号だけで、第3号・第4号は井筒以外には隅柱か、枠板の一部しか残されていない。第3号・第4号井戸跡は、前に述べたように水量が枯渇したために放棄したか、あるいは不都合で工事を中止したものと思われる。第2号から第4号井戸跡が近接した位置にあるところから、第3号・第4号の2本の井戸を先に掘り、何らかの都合ですぐ近くに井戸を掘って飲料水を確保したと考えられる。第2号井戸跡からはカスガイ、第3号からは刀子、第4号からは小刀が出土している。第2号のカスガイは、井戸の構造材を組むために用いられたと考えられるが、第3号・第4号の刀の類いは、どのような意味をもつのであろうか。第3号・第4号ともに何らかの不都合で廃棄されたと思われる井戸である。井戸を廃棄する際の鎮めものとして、井戸に祀られた可能性もその一つに考えてもよいのではないだろうか。今後の課題としたい。

第2号以外に井戸の構造材をすべて備えているのは、約3ｍ離れたところの第1号井戸跡である。埋没状況および、使用時の井戸の構造をそのまま備えている点から、第1号・第2号ともに長岡城の築城が始まる前まで使用されていた可能性がある。また、同一の屋敷で3ｍほどの範囲に2本の井戸をもつとは考えにくく、2本の井戸は別々の屋敷で使われていた井戸の可能性が高い。

また、土層断面に見られる第1次堀底の下にある溝は、堀底の下にあることから井戸跡と同じく中世の溝跡で、井戸をもつ屋敷を囲む溝であった可能性が高い。この溝は、図示した面にしか確認されず、トレンチの反対側には見られなかった。このことから、確認した土層面から若干北へ延びて東に折れ曲がり、第1号井戸と第2号～第4号井戸の屋敷を区切る浅い溝であったと考えれば、確認した面以外に溝が存在しないこともうなずける。

いずれにしろ、二の丸の堀底にある井戸から、この付近に複数の町屋などからなる中世の集落が存在したことは確かである。ここに居住した人々が、苧引形兜城や八文字構浮島城と称される長岡城の築城に際してどのような役割を果たしたのかも、今後の大きな課題と言えよう。

報告書抄録

ふりがな	ながおかじょうあとはっくつちょうさほうこくしょ
書名	長岡城跡発掘調査報告書
副書名	大手通り地下駐車場建設
巻次数	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	駒形敏朗
編集機関	長岡市教育委員会
所在地	〒940　新潟県長岡市幸町2－1－1　TEL　0258－39－2240
発行年月日	西暦1997年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかじょうあと 長岡城跡	ながおかしおおてどおり 長岡市大手通り1・2丁目	15202	146	37°26′39″	135°51′16″	19950913～960531	1,975	地下駐車場建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡城跡	近世城跡	江戸時代	堀跡（江戸時代）2本 井戸跡（中世）4本	唐津系碗1枚 珠洲焼・曲物・刀子 小刀など	中世の井戸跡が堀底で検出。

発掘調査前の大手通り
（長岡駅を望む）

道路舗装除去作業

路盤材除去作業

写真１　長岡城跡発掘風景①

遺構確認作業

堀跡発掘作業

堀跡土層断面図作成作業

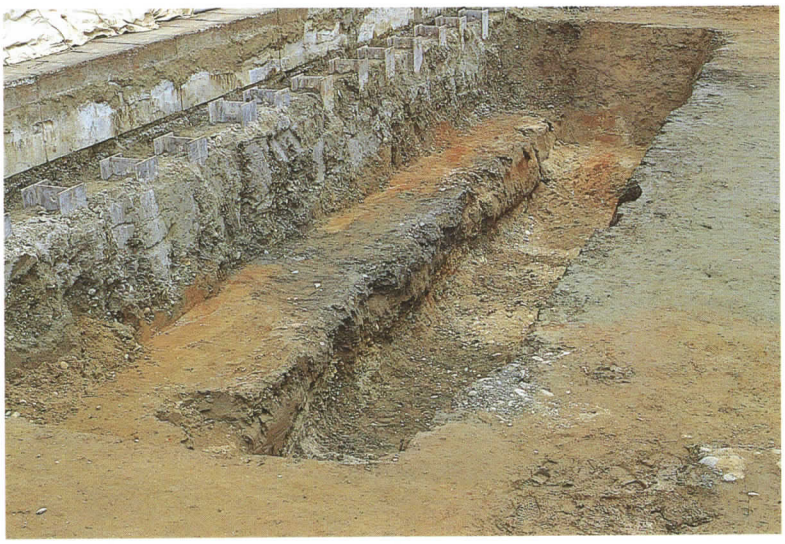
写真２　長岡城跡発掘風景②

二の丸の堀跡断面（C―1工区）
（第1号井戸跡）

二の丸の堀跡断面（C―1工区）
西天端

大手門付近の堀跡平面

写真3　長岡城跡の堀跡①

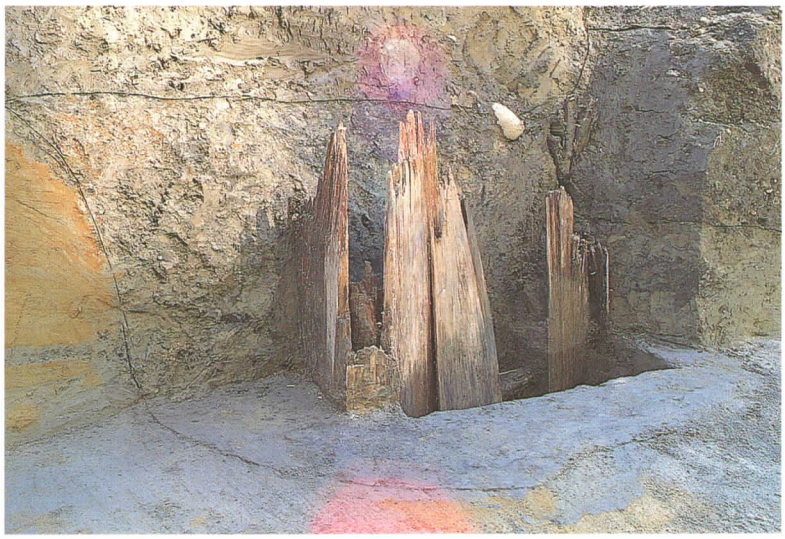


大手門付近の堀跡
（B－2工区）

大手門付近の堀跡断面
（B－2工区）

大手門付近の堀跡断面
（B－1工区）

写真4　長岡城跡の堀跡②



第１号井戸跡検出状況
（堀跡断面と）

第１号井戸跡
（東枠板）

第１号井戸跡断面

写真５　井戸跡①

第１号井戸跡井筒

第１号井戸跡井筒隅柱組方

第２～４号井戸跡検出状況

写真６　井戸跡②

第２号井戸跡
（東枠板）

第２号井戸跡隅柱組方

第２号井戸跡井筒

写真７　井戸跡③

第３号井戸跡

第４号井戸跡

第４号井戸跡遺物出土状況

写真８　長岡城の堀跡④

長岡城跡発掘調査報告書
－大手通り地下駐車場建設－

平成９年３月20日印刷　平成９年３月25日発行
発行：長岡市教育委員会　　印刷：株式会社　北越時報社